

## 合唱歌唱とソロ歌唱の発声に関する考察 (2)

— プロとアマチュアの合唱歌手, 合唱受講学生と合唱指揮者に対するアンケート調査を通して —

虫明眞砂子

合唱活動を行っている歌手や指導者は、発声をどのように捉えているのであろうか。アマチュア合唱団員、プロの合唱団員、教員養成学部合唱受講生、合唱指揮者を対象にアンケート調査を行い、自由記述の記述内容から発声の課題を検討した。その結果、ソロの発声技術と合唱の発声技術の両方を使用することに歌唱演奏者が苦勞しながら取り組んでいることが明らかとなった。ソロ歌唱と合唱歌唱の理想的な発声を得るためには、両者とも声楽発声の基礎を身につけた上で、ソロと合唱それぞれに特有な歌唱技術のコントロールができることが必要である。また、ソリストは、「合わせる」経験を積んでいく中で、合唱歌唱の技術を磨いていくことが必要であり、合唱歌手は、「ソリストの歌唱技術」を獲得することで、個々の歌唱技術を磨いていくことが必要である。

Keywords : 合唱, ソロ, 発声, 歌唱技術, コントロール

### I. はじめに

近年、声楽の専門教育を受けた歌手が、少人数のアンサンブル形式または大人数の合唱形態で演奏する場面を公共メディアで目にしたり、演奏会でもそのような場面に接する機会が増えた。その際の歌唱は、ソロ歌唱と異なり、音質や歌い方などを周囲に合わせて歌っているように思える。ソリストとして専門教育を受けた歌手は、自身の声の魅力を十分に発揮するための歌唱法を身につけており、合唱のような歌唱形態で演奏する場合、歌唱形態の相違により、発声面で違和感を抱く者も少なからず存在すると思われる。ソロ歌唱と合唱歌唱の発声については、教員養成学部における合唱授業においても、それぞれの発声は異なるのか、どのように異なるのか、あるいは発声は同一なのかという疑問を学生からしばしば質問される。歌唱経験の少ない学生から、合唱活動を行っている一般の合唱愛好者、またプロとして合唱活動を行っている演奏者まで、合唱歌唱とソロ歌唱の発声に関して、合唱活動を行っている歌手は個々に何らかの問題意識を持っているのでは

ないだろうか。

本稿では、教員養成学部における合唱授業受講者、アマチュアの合唱団員、プロの合唱団員、合唱指揮者に対するアンケート調査をもとに、合唱歌唱とソロ歌唱の発声面の課題を明らかにする。

### II. 合唱歌唱の問題点

合唱歌唱における発声に関しては、様々な問題点があるが、長年にわたって研究者により指摘されてきた。その代表的な意見は次のとおりである。発声研究家のフレデリック・フースラーは、合唱のように共同で歌唱する場合、発声器官に障害を与える危険性を指摘し、特に発声が未熟な歌唱者の喉頭への負担を述べている<sup>1</sup>。合唱指揮者のヴァルター・シュナイダーは、共同で声を調整すること、すなわちバランスのとれた均一の合唱の響きの重要性を指摘し、突出した声による合唱の響きへのマイナス面を指摘している<sup>2</sup>。さらに、音声生理学者のヨハン・スンドベリは、合唱とソロの歌唱における声の使い方は異なり、その相違について、合唱歌手は、他の人の音

色と混ざり合うように声質を調整するのに努め、ソロ歌手は、個性的な音色を作ろうとしていると述べている<sup>3)</sup>。以上の意見をまとめると、発声について、合唱のバランスの取れた均一の響きを作るために、合唱とソロでは声の使い方が異なるため、初心者の方の発声に対しては喉の衛生面での配慮が必要であることを指摘しているといえる。では、実際に合唱活動を行っている歌手や指導者は、どのように発声を捉えているのだろうか。この疑問に対して、アンケート調査を行い、その結果を以下に示す。

### Ⅲ. 合唱歌唱時の重要項目に対する留意点

この項では、アマチュアとプロの合唱団員を対象に行った合唱歌唱に関するアンケート調査で自由記述により回答を得た。

#### 1. 調査の概要

(1) 調査期間：平成28年2月20日～4月20日

(2) 調査対象

##### 1) アマチュアの合唱団員

①回答者：男83名 女433名 計516名 団体数38

②調査地域：岡山県，広島県，埼玉県，神奈川県，東京都

##### 2) プロ（歌手）の合唱団員

①回答者：男16名 女32名 計48名 団体数4

②調査地域：岡山県，広島県，兵庫県，東京都

##### 3) アマチュア合唱団の指揮者

①回答者：男8名 女5名 計13名

②調査地域：岡山県，広島県，埼玉県，神奈川県，東京都

(3) 調査内容

①ビブラート，②声量，③発音，④ブレス

#### 2. 調査結果と考察

(1) アマチュア合唱団員とプロ合唱団員の比較

合唱歌唱の際に、特に重要と思われる4項目、即ち①ビブラート，②声量，③発音，④ブレスについて、まず、アマチュア合唱団員とプロ合唱団員の自由記述回答から比較分析した。分析にあたっては、各項目の回答データからキーワードとなる単語と関連した文節を抽出し、類似性のある言葉または文節をキーワードでまとめたものを使用した。結果を図1から4に記載する。なお、自由記述回答者数は、アマチュア合唱団員では、ビブラート300名、声量333名、発音331名、ブレス317名、プロ合唱団員では、ビブラート40名、声量39名、発音37名、ブレス31名であった。

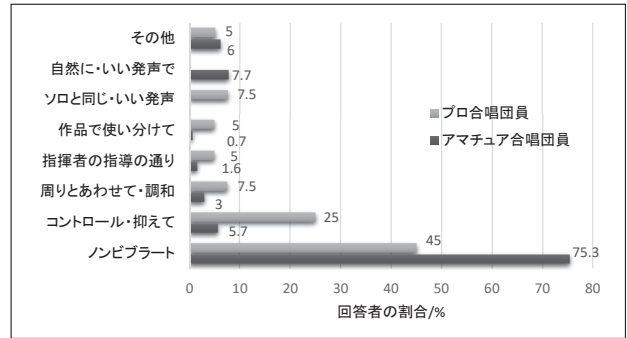


図1 ビブラート

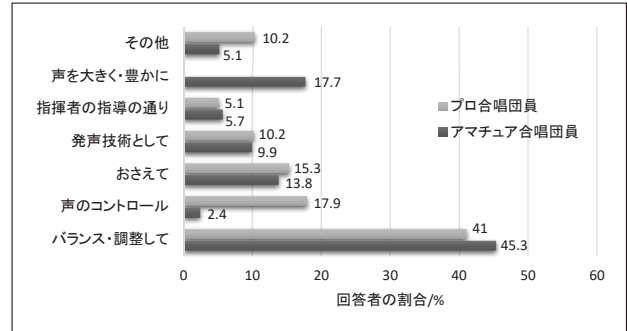


図2 声量

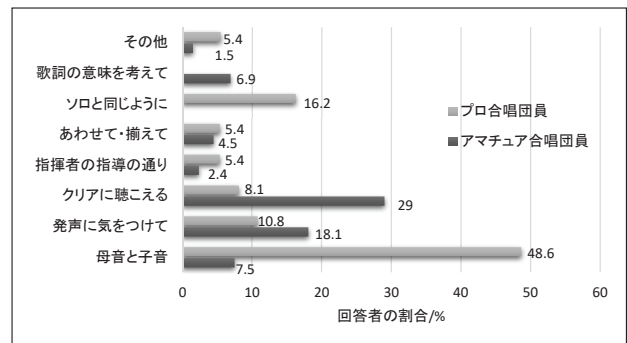


図3 発音

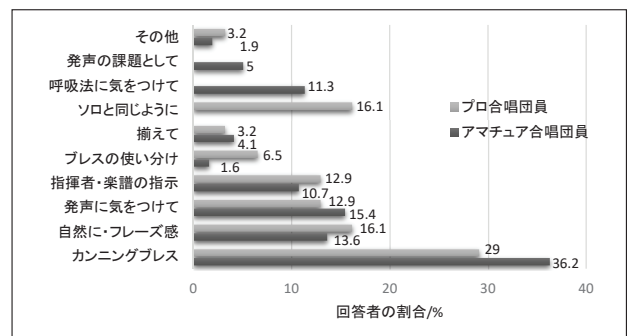


図4 ブレス

「ビブラート」の項目では、「ノンビブラート」という記述が大多数を占め、特にアマチュアの合唱団員では75%に上った。これに対して、プロ合唱団員では、「ノンビブラート」は45%で、「コントロールする」が25%であった。また、「自然なビブラート」（アマチュア）や「ソロと同じようなビブラート」（プロ）という表現になっているが、どち

らも“いい発声”の中でのビブラートという点では、同じ認識であるといえよう。次に、「声量」の項目では、両合唱団員とも“バランスや調節”を図るという記述が半数近くになった。「発音」については、ソロでは“母音と子音”の扱いに注意する記述、アマチュアでは“クリアに聴こえる”という記述の2者に分かれた。「プレス」の項目では、合唱歌唱では、両合唱団員とも“カンニングプレス”を利用していることがわかった。その際、“発声”や“フレージング”を大切に歌うことも共通している。

一方、回答で興味深いのは、「声量」の項目で、アマチュア合唱団員では、“声を大きく・豊かに歌う”という記述が約18%見られたことで、プロ合唱団員ではそのような回答は見られなかった。プロの合唱団員では、コントロールに関連した記述が約18%見られ、アマチュア合唱団員の2.4%との差異が大きい。このことから、アマチュア合唱団員は声量の不足を、プロ合唱団員は声量のコントロールを課題としていることが推察できる。次に、「発音」の項目では、プロの合唱団員は、“母音と子音”を強く意識しており（48.6%）、アマチュア合唱団員との差が約41%と一番大きい。この母音と子音に関する意識は、言葉の明瞭さを出す歌唱技術として重要である。この項目では、“ソロと同じように”と記述したプロの合唱団員も16.2%存在するように、ソリストは、独唱曲の中で、平素より常に母音の響きと子音の付け方やバランスについて研鑽している。また、ソロ経験者と合唱経験者の組み合わせによるアンサンブルの聴取実験でも、ソロ経験者のみによるアンサンブルは言葉の明瞭さで特に高い評価を得ている<sup>4</sup>。このことから、ソロ歌唱の“母音と子音”を意識した発音の歌唱技術は、合唱歌唱に活かされているといえる。プロ合唱団員に特徴的な回答として、「発音」の項目以外にも「ビブラート」、

「プレス」の項目に、“ソロと同じように”という回答があり、これはアマチュア合唱団員には見られなかった回答で、注目される点である。プロ合唱団の歌手は、ソリストの基本的な発声を合唱歌唱時にも常に意識していることが窺える。また、アマチュア合唱団の歌手は、呼吸法に気をつけ、発声の課題意識を持っているものが、あわせて16.3%存在し、呼吸や発声への意識が強いと思われる。以上のことから、プロとアマチュアの合唱団員は、発声面でそれぞれの難点をカバーするような意識を持っていることが推察できる。

(2) 合唱指揮者

次に、一般のアマチュア合唱団の指導にあたって合唱指揮者13名の自由記述を表1に記載する。ビブラートは、できるだけないほうがよいという考えが6名あったのに対して、ノンビブラートにこだわらず、自然なビブラート、曲に応じて調節できるビブラートを求める意見が4名あった。声量については、豊かな声量や自在な技術を求める意見もある一方、個々の団員の持っている美しい響きを大切に、個々の力量にあったディナーミクを求める意見が複数あった。また、響きに関しては発声面の支え等の指摘もあった。発音については、母音と子音の扱いに関するものが多数であった。クリアな発音にするために、母音の響きを重視し、母音と子音のバランスに気をつける意見が複数あった。プレスは、フレーズをつなぐため、また高齢者のためにカンニングプレスを多用させる意見があった一方、呼吸法や発声面を重視している指導者も複数存在していることがわかった。アマチュアの合唱団では、年齢層が高い団員が増加し、発声面で苦慮する団員も多くなっているのではないかと推測される。高齢者への合唱指導の方法も考慮すべき点の一つといえる。

表1 合唱指揮者による4項目の自由記述

ビ ブ ラ ー ト	<ul style="list-style-type: none"> <li>・できるだけない方が良い。</li> <li>・できるだけ少ない方が良い。</li> <li>・基本的でない方が周りとの溶け込みやすい。</li> <li>・できるだけビブラートのない声を目指す。</li> <li>・基本的には排除をするように団員には求めています、合唱内でのソロ等は別です。</li> <li>・ノンビブラートが基本です。合わせて音の処理（音じまい）を統一します。</li> <li>・声をお腹で支えようとすると息の流れが悪くなりきついビブラートがかかり、音程が不安定になりやすい。息の流れが良くなると自然なビブラートでアンサンブルが作りやすい。</li> <li>・曲の時代、内容に応じて、ビブラートを作る事もなくする事もできるのが本来だと思います。</li> <li>・必要な時にはつけ、いらぬ時はノンビブラートにできるテクニック。</li> <li>・強いビブラートは困るが、ノンビブラートにはこだわらない。</li> </ul>
声 量	<ul style="list-style-type: none"> <li>・楽譜に基づき、まず正確に楽譜を読み取ることにより、その内容でどのようなディナーミクが必要なのか考える事が声量であると理解します。</li> </ul>



声量	<ul style="list-style-type: none"> <li>・豊かなことにこしたことはない。</li> <li>・控える時は控え、出す時はしっかり出せるが理想。</li> <li>・声量は個人差で有るものなので、音色を悪くさせないようにしている。ピアノにおいてもフォルテにおいても、その個人の声で美しいと思われる声で歌わせる。</li> <li>・美しい響きを保った上での声量が大切。</li> <li>・個人差が大きく、技量が一樣ではなく、なんとも言えない。一人一人が自分の声を生かせたらそれでよしとする。</li> <li>・パート内でのバランスが大事。</li> <li>・響きが豊かであれば、一人一人の声量はあまり問わない。</li> <li>・個々の実力の範囲でダイナミックを決めてもらうように言うておりますので、絶対的な音量を求めることはしていません。(無理につながりますから)</li> <li>・響きが増すように倍音に留意してボリュームとしますが、鳴りのよい声も求めることもあります。</li> </ul>
発音	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語の曲、外国語の曲と異なった子音、母音の響きに注意する必要がある。簡単な説明ですが、子音は柔らかく、母音はしっかり声帯を響かす。また、日本語の「あ」と外国語の「A」はまるで異なる。同様「い」「う」「え」「お」も異なるので、曲により響きを考慮する。</li> <li>・クリアな発音が会場に届くように意識をしている。</li> <li>・やはり言葉が伝わらなくてはいけないが、子音の強調しすぎは問題。</li> <li>・丹田から支えられて出てくる、発音を心がけている。</li> <li>・声の支え方に違いがあると、子音、母音ともに揃わなくなってしまう。</li> <li>・クリアであるべきで、母音と子音のバランスが良いこと。</li> <li>・母音の響きが無くならないよう子音を発音する。</li> <li>・母音の響きを考えることに気をつける。</li> <li>・レガート唱法を基本に、母音が変わり、口形が変わることで響きを変えないことを中心にブツ切れにならないようにお願いしています。</li> <li>・アタック、コア、リリースの一連の動きは、母音、子音の両面からトレーニングし、発音につなげます。</li> </ul>
ブレス	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽の内容により、激しいブレス、静かなブレス、ゆったりしたブレスなど様々なブレスを使いこなせる様、指導、指示することが必要。</li> <li>・フレーズを生かすブレスの仕方を心がけている。</li> <li>・ブレスする前の声の切り方が大切。歌い手に考えがないと下がってしまう。</li> <li>・発声を整えることで、ブレスが足りないと思わせないようにしている。</li> <li>・合唱団の力量に合わせて、フレーズを大切にしたいブレスを考える。</li> <li>・長さよりも、呼吸の仕方が上手い方が良い。</li> <li>・体が崩れないよう、力を抜く程度。</li> <li>・フレーズを長く歌うためにカンニングブレスをパートで行う場合を作る。</li> <li>・年齢的にもハイエージな方が多いため、揃えてブレスする位置以外はうまくカンニングして、音楽の流れを切らないよう、回数は制限していません。</li> <li>・「支えは、下とそして首のうしろにある」以前、M先生にレクチャーいただいたときに気づいた大切なことです。その下の方の息の流れがとても大きなカギをにぎっているため、ブレストレーニングは必須です。</li> </ul>

\*ゴチック体太字の部分は、合唱指揮者が各項目に対して明確な考えを示している言葉、文節を示す。

### 3. まとめ

アマチュアとプロの合唱団員に関して比較した結果、類似点については3点挙げられた。

- (1) 「ビブラート」について、ノンビブラートを主体としている。
- (2) 「声量」は、どちらもバランスの重要性を認識している。
- (3) 「ブレス」は、“カンニングブレス”を利用している。

相違点については、以下の3点が挙げられた。

- (1) アマチュア合唱団員の特徴的な回答として、「声量」の項目で、“声を大きく・豊かに歌う”という記述が18%見られたこと。
- (2) 「発音」については、ソロでは、“母音と子音”，アマチュアでは、“クリアに聴こえる”という

記述の2者に分かれたこと。

- (3) プロ合唱団員に特徴的な回答として、「ビブラート」、「発音」、「ブレス」の項目に、“ソロと同じように”という回答があったこと。

合唱指揮者の回答に関しては、以下の4項目の特徴が挙げられた。

- (1) ビブラートについて、“ないほうがよい”という考えと“調節できる”という考えの2つに分かれた。
- (2) 声量は、個々の歌い手にあったダイナミックを重視している。
- (3) 発音は、母音の響き重視し、母音と子音のバランスに気をつける。
- (4) カンニングブレスに加えて、呼吸法や発声面を重視している。



アマチュア・プロの合唱団員・合唱指揮者とも回答の傾向はほぼ同じであると思われる。指揮者については、アマチュア合唱団の指導者として、個々の歌い手に相応しい声量や発声や呼吸法を重視しているといえる。

#### IV. 合唱歌唱の発声の課題（全般的）

##### 1. 教員養成学部の合唱受講生の場合

2017年度「合唱」の受講生11名の合唱歌唱に関する意見を記載する。受講者の大半は、合唱の初心者である。合唱と平行して、声楽演習を履修し、ソロの勉強を並行して行っている者が7名存在する。今期は、受講人数が11名と少人数であったため、演習は混声小編成のアンサンブル形態で行った。そのため、各パートは2名～3名で担当する形となる。

さらに、受講生の中には、ソロ歌唱を専門に学習してきた学生も1名含まれた。少人数の合唱の場合には、一人ひとりの声質が全体に影響してくるため、合唱実践の中で、学生一人ひとりが、それぞれ合唱に必要なものは何かを熟慮し、パフォーマンスの質を上げることに努力を傾注した。今期の合唱の最終授業後に、演習の経験をもとに考えさせる「合唱歌唱のときに、気をつけること、大切なことは何だと思いませんか」という課題を課した。その中で、以下のような記述が見られた。文章の記述を項目ごとに区分し、原文のまま記載する。

(1) 課題提出：平成29年7月28日

(2) 調査対象：合唱受講者〔1年生（1名）2年生（7名）3年生（2名）大学院1年（1名）、男子5名 女子6名 計11名〕

表2 合唱歌唱の課題（自由記述）

聴くこと・合わせること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他のパートや同じパートの声を聴き、合わせることが大切である。</li> <li>・少人数のアンサンブルでは周りと声質やピッチをさらに合わせなければ、独唱の集まりになり、合唱にならない。</li> <li>・同じパートのみならず他のパートとしっかり合うように気をつけること。</li> <li>・合唱は聴くことが大切である。</li> <li>・合唱はそれぞれの人の声の一つに揃うことで美しい。</li> <li>・第一に、自分自身の声をしっかり聴くことが欠かせない。</li> <li>・ノンビブラートで歌えているか、正しい音が取れているかなど自分自身の声も客観的に感じられるよう意識していくこと。</li> <li>・周りの声を聴き、ピッチがずれていないか、声質が合わせられているかといった意識が重要。</li> <li>・合唱の魅力は、きれいなハーモニーを奏でることである。</li> <li>・合唱においては、調和の必要性を感じた。</li> <li>・バランスと歌詞にふさわしい歌い方が大切。</li> <li>・メンバーが同じレベルで歌わないといけない</li> <li>・まわりの声を聴き、上手く調和するように歌うことが大切である。</li> <li>・一人だけ飛び出してしまうたり、うしろに引っ張ってはいけない。</li> <li>・皆が同じような音色で歌うことが大切である。</li> <li>・他の人とピッチを揃えることが一番大切である。</li> <li>・自分が思っている以上に、他の人の声に耳を傾けようと意識することがとても大切だと感じた。</li> <li>・小さい空間で歌うのではなく、皆で合わさった声を聴くことが重要であるとわかった。</li> <li>・どうしたら声が溶け込むかなどを考えて、たとえ自分が歌いたい歌い方でなくても合わせていかなければならないと思う。</li> </ul>
共通の認識力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全てのパートの音を確認して、どんな響きになるのかを把握しておくこと。</li> <li>・この和音はきれいな響きだから周りのパートとしっかり溶け込んできれいな響きを創ろう、この音は長2度でぶつかっているから音だから意識するなど考える事が大切だ。</li> <li>・全てのパートが、歌詞等を意識して、感情を込めて思いが溢れるように歌うよう注意しなければならない。</li> <li>・全員で曲の共通の雰囲気は曲の共通の解釈をすることで、まとまった歌ができる。</li> <li>・少人数のアンサンブルでは、発声や曲の理解など、歌い手全員が共通の意識をしないと上達できない。</li> <li>・10人あまりの少人数の合唱は、歌っている日と全員が同じようなことを意識しないと上達できない。</li> <li>・さまざまな他の合唱団を聴いて、どこが良いかを感じて自分の中に取り入れていくこと。</li> <li>・体調管理が悪いと声が出ないし、音程も不安定になり、楽しく歌うことができなかったのも、せめて普通の状態を保ち、その状態で歌える技量を上げていけたらなあと思った。</li> <li>・広い目、広い耳を持つことが大切だと感じた。</li> </ul>
発声	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「生きた合唱」を創っていくために、発声の基礎が必要である。</li> <li>・ある程度発声技術の正確な方法を体得するとともに、イメージによるところが大きい。</li> <li>・音量を落とせること。</li> <li>・力を入れすぎないで、ある程度リラックスすることも非常に大切だと感じました。</li> </ul>

発声	<ul style="list-style-type: none"> <li>・力まずに力を上手く抜くことでプレスが思った以上に続くということを初めて知り、とても感動しました。</li> <li>・楽に歌えることが重要。</li> </ul>
ソロと合唱の声の差	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ソロ歌唱のようなビブラートのかかった声でなく、周りにあわせて声量を落とし、「調和」の必要性を感じた。</li> <li>・自分が歌いたいように全員が歌うと素敵な合唱は生まれない。</li> <li>・前半授業では、声楽における発声と同じように発声していたが、ビブラートのかかった声で浮いているとの指摘を受け、後半授業では、ダイナミクスを押さえるようにした。</li> <li>・ソロは自分の歌声を響かせ飛ばすことが大切で、ビブラートもかけ、アピールをしっかりとすることも重要。一方、合唱では、自分ばかりが目立ってはいけない。アンサンブルでは、周りとの調和が大切であり、ソロとは歌い方を変えなければ、バランスは取れない。</li> <li>・合唱の発声と声楽の発声を使い分けるべきなのかが分からなかった。どのように使い分けるのかわからない。自分の技術が足らなくて分からないのだと思うので、もっと上手になりたい。</li> <li>・合唱なので独唱とは異なる。</li> </ul>
歌詞	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歌詞が一番大切だと感じた。器楽と違い、合唱には、歌詞が有り、そこに情景があり、想いがある。それを気にするとしないのでは、出来に大きな違いがある。</li> <li>・歌詞の意味を考え、感情を込めて想いが溢れるように歌うこと。</li> </ul>
仲間	<ul style="list-style-type: none"> <li>・合唱の仲間同士の信頼関係が必要。</li> <li>・リラックスして歌える雰囲気作りが大切ではないか。</li> </ul>

\*ゴチック体太字の部分は、各項目において重要と考えられる言葉、文節を示している。

回答を大まかに分類すると、「聴くこと・合わせること」に関するもの(19件)、「合唱者共通の認識」に関するもの(9件)、「発声」に関するもの(6件)、「ソロと合唱の声の差」に関するもの(6件)、その他、「歌詞」、「仲間」に関するものになった。

今期の合唱は、先に述べたように、少人数でのアンサンブルになったため、大人数の合唱より問題意識が明確になっていると考えられる。合唱歌唱の課題では、まず、「聴くこと・合わせること」の重要性<sup>5</sup>に集中している。多数の意見は、ピッチ、声質、音量等を調整し、バランスよくすること等の意見である。「発声」に関しては、ソロ歌唱との差異を問題意識としている学生が多く見られ、それらも入れると12件にのぼる。発声の技術面では、声量、ビブラートのコントロール、バランス、力まず楽に歌唱できる発声技術面の指摘がある。また、「ソロと合唱の声の差」では、ソロ歌唱との発声の差異、調和、ソロ歌唱のビブラートの問題が指摘され、ソロ

と合唱の発声や歌い方を区別することの重要性を指摘している意見も複数あった。

合唱受講生が抱いたこれらの問題意識はすべて、合唱活動の基本とするものではあるが、合唱経験の少ない者にとっては、困難な課題でもあるといえる。さらに、ソロと合唱の発声に関しては、「合唱の発声と声楽の発声を使い分けるべきなのかが分からなかった。どのように使い分けるのかわからない。」という意見に見られるように、両者の発声を使い分けできる発声技術を獲得することは、合唱の初心者にとって大きな課題であるといえよう。

## 2. プロ合唱団員の場合

では、ソリストとしての活動と合唱団員としての活動の両方を経験しているプロの合唱団員の場合、合唱歌唱をどのように認識しているのだろうか。良かったと感じる点と難しいと感じる点について、自由記述で回答を得た。原文の形で記載する(表3)。

表3 合唱歌唱に対する捉えかた(プロ合唱団員)

良かったと感じる点	難しいと感じる点
<p>&lt;ハーモニーの美しさ・ハーモニー感の向上・アンサンブルの楽しさ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ハーモニーの重要さがわかる。</li> <li>・ハーモニーの美しさや、心が一つになったとき、みんなできつていく喜びを感じられる。合唱曲のフレーズの中で、自分の欠点に気づき、発声の勉強に役立てられる。</li> <li>・たくさんの曲を知れる。ハーモニーを感じながら歌える。みんなですべて1つのものができるのが楽しい!!</li> <li>・いろんな体験ができるので楽しい。</li> <li>・和声感が身につくやすい。</li> <li>・今はとくに合唱団に所属していないが、アンサンブルにとっても興味があるので、両立させてみたいです。</li> <li>・アンサンブルの感覚が鍛えられソロにも活かすことができる。</li> </ul>	<p>&lt;ソロ歌唱・発声への影響&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人と合わせて歌うと自分の声分かりづらくなる。</li> <li>・声をおさえないといけなくて、負担に感じる。ソプラノはpを強要される。</li> <li>・周りの発声の影響を受けやすいこと。</li> <li>・ソロを歌うとき、スケールが小さくなることぐせになってしまう。</li> <li>・発声を常にととのえる必要がある。</li> <li>・合唱で歌うことに慣れすぎて、声が棒のようになっていたり、表現力が乏しくなった。使い分けるのには時間がかかると思う。</li> </ul>

<ul style="list-style-type: none"> <li>・アンサンブル時にバランスを取る意識が持てたこと</li> <li>・勉強になる。</li> <li>・ハーモニーを色々な意味で感じられること。例えば、和声、バランス、人間関係！？等々。</li> <li>・複雑なハーモニー、アカペラ、壮大な曲、等美しいハーモニーを作る意識ができる。</li> <li>・ハーモニーの一員として、周りをよくきいてバランスを考えるようになった。</li> <li>・ハーモニーを意識したり、音程をきちんととることが身についた。</li> <li>・ハーモニー感はソロであろうともいつも感じて表現せねばならないが、合唱をすることで、より意識することができた。ピタリと響きがはまったときはやはり気持ちが良いし、音楽の醍醐味を味わえる。</li> <li>・楽譜の見方が（他声部や和音の変化、フレーズ感など見ることで）深くなった。アンサンブルの楽しさを知ることができる。</li> <li>・ハーモニー感などは合唱をしていて本当に勉強になっています。現代曲の様な曲は、人数のいる合唱団で歌えると、新しい音楽の世界の入り口を感じます。</li> <li>・アンサンブルをする際の耳が鍛えられた。</li> <li>・合唱していると、音程、声の質、フレーズ、和音に気をつけるようになってよかった。ソロのときは自由に歌っているので…。</li> <li>・アンサンブル力がついたこと。音程が正確になった。</li> <li>・アンサンブルする上で、和声感が養われて、点でとらえるのではなく、面で音をとらえられるようになったと感じている。和音の上にハマる感覚や乗っかる感覚など。</li> <li>・アンサンブル能力が上がる、適応力が上がる、早くなる。</li> <li>・アンサンブルの勉強になります。和声の勉強になり、ハーモニーが合った時に幸福感を感じます。普段、ソロで感じるよりも、音程や息のスピード、息を合わせるという事に意識を持つ事を体感しています。</li> <li>・周囲の音を聴く力、ピッチの感覚が鋭くなった。</li> <li>・アカペラやハーモニーなど意識することによりソロのときもピアノのハーモニーやオケの音などの上に乗る意識がとりやすくなった。</li> </ul> <p>＜ソロ歌唱へのメリット＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・両立させることで、アンサンブル能力、個の表情など、様々な引きだしを持つこと出来るようになっていと感じます。</li> <li>・自然な声を出すことができるようになり、長時間歌えるようになった。指揮に合わせることになった。</li> <li>・音程・和声観をソロでも意識できるようになった。</li> <li>・すべて。</li> <li>・それぞれで歌う喜びを感じることが出来る。</li> <li>・両立が出来る</li> <li>・ソロだけでは知りえなかった、心の響く歌や人に出会えたこと。歌の色々な可能性を知れたこと。</li> <li>・他の方と発声のちがいを学べる。</li> <li>・ソロだけでは学べないこと、ハーモニーや人の意見を学べるいい経験だと思います。</li> <li>・合唱的なアプローチによって、発声のことでソロとは違う発見がある。</li> </ul> <p>＜演奏の幅の広がり＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の興味が無いジャンルの曲にも挑戦でき、演奏の幅が広がる。</li> <li>・舞台に出さしていただけということ。やはり、オペラの舞台が好きだと実感できること。お客様に聴いて頂けると言う事。海外のソリストの歌を近くで聴いて勉強させてもらえる。</li> <li>・曲のレパートリーが増えた。</li> <li>・色々な音楽に触れることが出来る（時代・言語など）。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・色々な発声の仕方、いろんな声があるので、自分を見失いやすい。まだまだ発声が出ていないので周りに影響されやすい。稽古の時間をとる</li> <li>・自分の声をソロのときに聴きすぎてしまう。</li> <li>・持っている声をセーブして歌わないといけなくて声楽ソロの為の発声においてはマイナス面が多い。体を使って支えられた発声で歌うと、響きが（合唱団の響きを）突き抜けて飛び出てしまい、合唱の響きにハモらなく目立ってしまう。楽譜の見方など理論的な面で合唱は勉強になるが、ソロの勉強には発声的に合唱と一緒にやることはマイナス面が多いと感じる。</li> <li>・長時間歌うことは声を酷使する。</li> <li>・クオリティを合わせることで、発声に無理が生じてしまうことがあるように思う。曲とテキストから連想する色が、人それぞれの所。美しい音の観念が違うところ。時には個人の長所を押し殺さなければならないこと。個人の長所が、合唱では短所になりうることもある。原語（母国語）の違いで、発声や発音（母音）が違うところ。</li> <li>・合唱ばかりしているとソロで歌う感覚がわからなくなる。</li> <li>・合唱とソロのバランスで悩み続けている。</li> <li>・ソロのときの個性を消さないようにすること。</li> </ul> <p>＜合唱歌唱の難しさ＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・それぞれに難しいと感じる曲やフレーズがあるように感じます。両立しているから…とは言えない。</li> <li>・本当の意味での両立は難しいと思います。特に現代合唱や北欧系の合唱曲はソロの歌い方と全然違う気がします。</li> <li>・ソロとの発声が少し違うので、切り替えが少ししてこずる。</li> <li>・ピッチをあわせたりすること</li> <li>・双方で自分に求められる役割が異なる点です。</li> <li>・合唱の中でソロ的になることはあまりないが、逆にはなりやすいので強い注意が必要。</li> <li>・声の使い分けが難しく今も勉強中です。</li> <li>・音程の幅？が特に難しい。（男声合唱のとき）</li> <li>・自分の声をソロのときに聴きすぎてしまう。</li> <li>・どちらかの活動に力点が置かれると、バランスが偏ってしまうこと。切り替えが難しい。</li> <li>・声量や言葉の発音など。</li> <li>・苦手な音域が多い点（中音域）。</li> </ul> <p>＜その他＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・たくさん楽譜を覚えるのがしんどい。</li> <li>・いずれの時も客観的に自分の立ち位置を考えているのですが、ソロになると的が絞られて、一回一回の合わせが大切でシビアだと感じます。</li> <li>・良かったと感じる点が、反対に難しいと感じる点でもあります。</li> <li>・全員の意識がまとまっていくこと。</li> </ul>
---	---



<p>&lt;その他&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・基本的に、別々で意識したことがないので、あまり違いを出せません。役割が違うので、発声に関しては、自分のよい声を出すことだけ考えています。</li> <li>・舞台での経験を多く積むことができる。</li> <li>・発声上の両立は難しいと考え、辞めてしまったので、音楽的な利点はわかりません、人間関係のコミュニケーションを繋げるといふ意味では良いのかもしれませんが。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アマチュアの合唱歴の長い方々は、自分が声を出して支えてやる！の意識が強く逆にハーモニーをこわしているのが分かっていない人が多い。</li> <li>・全くない。</li> <li>・常に向上心を持ち続け、勉強していくこと。出来ていたことができなくなったりする事も多々ありますが、続けること。</li> </ul>
---	--

プロの歌手が、合唱歌唱をする際に、メリットに感じる点として多かったのは、「ハーモニーの美しさ・ハーモニー感の向上・アンサンブルの楽しさ」に集約され、アンサンブル能力やハーモニー感が磨かれる点、ハーモニーの美しさや歌う喜びを体験している点であった(24件)。また、「演奏の幅の広がり」に集約されるように、アンサンブルを経験することで、ソロ歌唱だけでは経験できなかった新たな音楽経験や人とのつながり等を持つことができることにメリットを感じているのがわかった。

一方、ソロ歌唱・発声への影響の自由記述にも見られるように、合唱歌唱で全員の声を合わせるために声をセーブすること、また合唱とソロの声を使い分けることによって、ソロをする際の発声に何らかのマイナスの影響があると感じていると同時に、合唱歌唱の難しさを認識している点にも注目したい。

教員養成学部の学生の課題の中にも同一の意見が見られたが、合唱とソロの発声の使い分けにおいて、違和感を持つプロの合唱団員も複数存在することが明らかになった。声楽科でソリストとして学ぶ際には、アンサンブルとしての「合わせ方」を学ぶ機会が少ないと思われる。ソリスト教育に合唱のような声を合わせていく視点が加わることで、発声技術の向上や音楽表現の幅が広がることが期待される。

### 3. 合唱指揮者の場合

ここでは、合唱指揮者が長年の指導経験の中で、発声の指導をどのように考えているのか、多角的に考察する。まず、ソロと合唱の発声の差異、その理由、問題意識について、個々に記載する。空欄は記載がなかった部分である。

表4 発声で問題を感じる点について(合唱指揮者13名)

No.	ソロと合唱の発声の相違の理由	発声の問題点
1	ソロの発声で、アンサンブルの出来るテクニックがあれば理想的な合唱ができていると思っています。	特に、発音、発語の時に難しさを感じます。ミサ等、特に歌い出しの部分、子音の発声、どの位置(譜面上)で息を流し始めるか、母音の色をどの様にまとめていくかかなり時間をかける。アマチュアの場合、母音唱が効果をあげる事が多い。子音、母音が同時、発音、発声をさげ、子音、母音を分離させた発声、発語を目指すことがきれいなアンサンブルを作る一過程であると思う。
1		一般の市民合唱団では問題を感じることは多々ありますが、それらも含めて、全体としてどう整えていくかが指導者の責任と考えています。
1	どちらも自在な発声と豊かな声量が必要。ただ合唱の場合は、周りの人に合わせる必要があるので、マイウェイで歌ってはダメ。	年配の合唱団なので、指導したことがなかなか身につかない。喉ひろくしっかりした支えで鼻腔に響く発声を目指す、すぐせまい喉で歌うことになってしまうのが悩み。
1	それぞれに必要なとされる発声における「テクニック」の違いはあるが、「基本的な発声法」が一つに定まっている事で、合唱にもソロにも活きる声が出せると思います。	アマチュアの合唱団、指導者が中心の合唱音楽であることが原因であると思いますが、コンクールなどでも、正しい発声で演奏している合唱団は本当に少ないと思います。NHK全国大会などで金賞を取る合唱団でも本当に汚い声を出している合唱団があります。日本語の発音の固くこもった発声をよしとする傾向が見受けられます。ヨーロッパの合唱団の伸びやかな声をもっと日本の合唱団は参考にするべきだと思いますし、もっと本当の発声法の素晴らしさを知ってもらいたいと思います。
1 5	本来は同じであるべきだが、現状は異なっている。合唱もソロも両立できる発声法を見出せない限り異なったままだと思います。	合唱は、アマチュア同士での価値観が中心なので、発声についても表面的なとらえ方でよしとする傾向にあります。音量、パワーで押し切るような演奏ではなく、音の美しさを表現できる喜びを感じたい。

合唱歌唱とソロ歌唱の発声に関する考察（2）

1	本来は同じであるべきであるが、正しい発声を身につけていない団員が多ければ、結局「合唱の発声」にせざるを得ない。	
2		
2	良い発声の基本は同じである。ただし、求められる能力には差がある。	発声の基本であるが、問題は山のように日々起こります。あらゆるレベルとタイプの団員がいるので、こちら側に力が足りないと対処できません。発声は基本ではあるけれど、ごく一部の要素なので我々は様々な知識と経験で指導しています。
2	のどや鼻腔等、体を楽器として響かせるという観点において同じであるから。	
2	基本的な部分は大切なところが同じだと考えていますが、最後のところで少し異なる部分もあると思います。	一人一人の歌声の個性を殺してしまうことなく統一のある響きの合唱団を作ることの難しさを感じる事が多くあります。のびのび歌いつつ、響きが揃ってくるような指導の方法を模索している。
4		
4	複数の人間の共鳴を主体に音楽を作っていくため、音づくりの中心がソロとは異なる。ただし「気柱」を共鳴させる点では共通である。	外部の専門家の方にお問い合わせを頂ませんが、定期的にボイストレーニングをお願いしながら声や団としての響きのメンテナンスを行っています。やはり小さい団だと謝金などの問題も切り離せません。発声での問題というより団の維持の問題ですが。あとはキャリアの長い人の頑固さですかね。
5	合唱での響き（ひとつの統一感やフレキシブルなコントロールがしやすい）を生み出す発声はやはり「合唱の発声」があると思います。しかし、ソロの声は多種多様な求め方や美しさがあると思いますので、単純に「ソロの発声」としてひとくくりにはできないのではないのでしょうか。ポップスとクラシックの、又、フォークロアの領域だけでなく、同じクラシカルな声楽家の中でも波多野睦美氏などは、合唱であっても美しく融合しておられる気がします。オペラ歌手の方を「ソロ」とイメージして比較するのであれば、異なっていると思います。	今感じていることは、息の流れと耳（聴く）で発声を作っていくことが大切ということです。

\* N0：1 ソロと合唱の発声は同じである 2 まあ同じである 3 わからない 4 まあ異なっている 5 異なっている

ここに記載した合唱団の指揮者は、いずれも一般のアマチュア合唱団の指導を行っている。出身は、声楽科が6名、大学のサークルが5名、ピアノ専攻が1名、その他が11名となっている。ソロと合唱の発声が「異なっている・どちらかといえば異なっている」としたのは、3名、「わからない」は0名、「どちらかといえば同じである・同じである」は、10名であった。指揮者の大半は、発声の基本は同一であると捉えていることがわかった。「異なる」とした意見には、1名は「音作りとしては異なるが、気柱として共鳴する点は同じ」、また1名は、ソロの発声の多様性を述べ、「オペラの声はソロとすれば異なる」と述べている。「同じである」とした意見では、「本来は同じである」とした上で、難しい現状を述べている。「ソロの発声で、アンサンブルの出来るテクニックがあれば理想的な合唱である」の意見にも見られるように、両歌唱に適する発声技術が必要と考えられる。指揮者の回答からは、合唱

団それぞれの目標、団員の個性、レベルに合わせて、それにあった指導を行う中で、団の課題や悩みがうかがえた。発声の問題点として、以下のような点が挙げられている。

- ・発音（母音と子音）
- ・全体のまとめ方
- ・高齢者の指導
- ・正しい発声法の追求
- ・多様な団員への指導の模索と研鑽
- ・発声の専門家の指導と団の維持（経済面）

#### 4. まとめ

全般的な合唱歌唱の発声の課題について、合唱授業受講生、プロの合唱団、合唱指揮者を対象に質問紙調査した結果、それぞれ以下のようにまとめることができる。

- (1) 合唱授業受講生は、聴くこと・合わせること、ソロと合唱の発声の差異を認識すること、合唱

者が共通の認識をすることなどを重要に考えている。

- (2) プロ合唱団員は、「ハーモニーの美しさ・ハーモニー感の向上・アンサンブルの楽しさ」にメリットを感じている一方、「声をセーブすること」、また「合唱とソロの声を使い分けること」によって、ソロをする際の発声に何らかのマイナスの影響があると感じている。
- (3) 合唱指揮者は、ソロと合唱の両歌唱に両立できる発声技術が必要と考えている。また、団員の個性やレベルに合わせた指導を模索している。

## V. 結論

今回の調査から、ソロの発声技術と合唱の発声技術の両方を使用することに歌唱演奏者が苦労しながら取り組んでいることが明らかとなった。この結果から言えることは、ソロ歌唱と合唱歌唱の理想的な発声を得るためには、まず、両者とも声楽発声の基礎を身につけ、無理のない、喉を酷使しない発声を習得することが求められる。その上で、ソロと合唱それぞれに特有な歌唱技術、すなわちビブラート、声量、音程、発音、プレス等の正しい技術を獲得し、これら声楽テクニクのコントロールができることが理想的な合唱歌唱につながる。また、ソリストは、「合わせる」経験を積んでいく中で、合唱歌唱の技術を磨いていくことが必要であり、合唱歌手は、「ソリストの歌唱技術」を獲得することで、個々の歌唱技術を磨いていくことが必要である。これらの技術を双方が獲得できれば、時代に応じた声楽様式や様々なジャンルに適応した音色を生み出すことができ、音楽表現のさらなる広がりが期待できる。

## 謝辞

ご多忙の中、アンケート調査にご協力いただきました一般のアマチュア合唱団、プロの合唱団の団員および合唱指揮者の皆様、教員養成学部の合唱受講

学生に心より感謝いたします。

## 付記

本稿は、科学研究費補助金基盤研究C「合唱歌唱とソロ歌唱の発声比較の視点から見た歌唱教育の再構築—発声の可視化の活用—」課題番号：16K04690の研究成果の一部である。なお、調査の対象となった合唱授業の受講学生、アマチュア、プロの合唱団員、合唱指揮者には、書面及び口頭にて調査の趣旨を説明し、調査結果の論文への使用の了解を得ている。

## 注と参考文献

- 1 Frederick Husler and Yvonne Rodd-Marling, *Singen; Die physische Natur des Stimmorganes; Anleitung zum Aufschließen der Singstimme*, Schott Musik, 1965. フレデリック・フースラー, イヴォンヌ・ロッド＝マーリング, 須永義雄, 大熊文子訳『うたうこと 発声器官の肉体的特質-歌声のひみつを解くかぎ』音楽之友社, p.158, 1987.
- 2 Walter Schneider, *Einsingen im Chor*, Edition Peters 1972. ヴァルター・シュナイダー, 監修ライnholt・ベンル, 山内すみえ, 今田理枝訳『合唱の発声練習』シンフォニア, p.5, 2000.
- 3 Johan Sundberg, *The Science of The Singing Voice*, Northern Illinois University Press, 1987. ヨハン・スンドベリ, 榊原健一監訳, 伊東みか, 小西友子, 林良子訳『歌声の科学』東京電機大学出版局, pp.144-145, 2007.
- 4 虫明眞砂子・須田千帆美, 合唱歌唱とソロ歌唱の発声に関する考察(1), 岡山大学大学院教育学研究科研究集録第164号, p.70, 2017.
- 5 吉村元子監修, 『もっとステップアップできるコーラス上達のポイント200』, メイツ出版, p.14, 2010.